

生きている教会

2009.11.17(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

使徒の働き 12章1節から17節

そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕えにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった。ヘロデはペテロを捕えて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであったからである。こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。すると突然、主の御使いが現われ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい。」と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。そして御使いが、「帯を締めて、くつをはきなさい。」と言うので、彼はそのとおりにした。すると、「上着を着て、私について来なさい。」と言った。そこで、外に出て、御使いについて行った。彼には御使いのしている事が現実の事だとはわからず、幻を見ているのだと思われた。彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた。そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、確かにわかった。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての災いから、私を救い出してくださったのだ。」こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。彼が入口の戸をたたくと、ロダという女中が応対に出て来た。ところが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり門を開けもしないで、奥へ駆け込み、ペテロが門の外に立っていることをみなに知らせた。彼らは、「あなたは気が狂っているのだ。」と言ったが、彼女は本当だと言い張った。そこで彼らは、「それは彼の御使いだ。」と言っていた。しかし、ペテロはたたき続けていた。彼らが門を開けると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださったかを、彼らに話して聞かせた。それから、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください。」と言って、ほかの所へ出て行った。

今、司会の兄弟がお読みになりました箇所は、本当に素晴らしい箇所です。使徒行伝はなぜ書かれたかと言いますと、特別な教えを宣べ伝えるためではありません。歴史の本なのです。主はどのように教会を起こされたのか、どのように導いてくださったのかの報告だけなのです。この使徒行伝を読むとはっきり分かりますが、初代教会の人は、「生きている教会」そのものでした。「死んでいる教会」ではなかったのです。今世界中の教会を見ると、この時代は生きている教会よりも、死んでいる教会のほうが多いのではないのでしょうか。

では、信じる者の一番欠けているところは何でしょうか。それは「祈り」です。確かに困った時、誰でもすぐに祈るでしょう。いわゆるさし迫った祈りがあります。でもそれだけでは十分ではないでしょう。せっぱ詰まった祈りが、必ずしもみこころにかなう祈りであるかどうか問題なのです。主は、人間に仕える召使いではあられません。「おい、困っているから助けてくれ」と。それは違います。そのような浅薄な祈りしかささげられない信者こそが、問題ではないでしょうか。「主を恐れる恐れ」はないのではないかと思います。

いったいどうして多くの信者は、「イエス様をよりよく知る」ことができないのでしょうか。どうして主がもっともって力あるみわざを行なうことがおできにならないのでしょうか。なぜある兄弟姉妹が急に姿を消したりして、ともに「主を知りたい」と望んでいないのでしょうか。私たちが、祈らなかったからです。「みこころにかなう祈り」をささげなかったからです。祈りの不足は、悪魔の勝利を意味します。

私たちが新たに自分の過ちと、盲目にされていることを認めることができれば、本当に有り難いです。そのためには、主のみこころにかなった模範的な、「祈っている教会」を観察すると、非常に助けになると思います。

この使徒行伝12章に出てくる教会は、確かに「生きている教会」でした。どうしてでしょうか。「祈りをしていた教会」だったからです。この12章に書かれている祈り会の結果は、とても大切でした。これは、ペテロの解放やエルサレムで行なわれた出来事だけではなく、24節に書かれていることです。『主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った。』即ち、全世界に福音が盛んに広められた。イエス様が紹介されるようになった、ということです。もう一度、1節を読みます。

使徒の働き 12章1節

そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、

とあります。

「そのころ」と書いてありますが、いったいどのような時だったのでしょうか。即ち大いなる祝福と霊的な勝利の時期でした。多くの人々が回心を経験し、兄弟姉妹が喜びながら

主を賛美し、前進した時でした。パウロとバルナバは大胆に福音を宣べ伝えました。彼らは一年間、ちょっと離れているアンテオケの集会で一生懸命奉仕し、結果として祝福されるようになりました。彼らが主にあって喜んで交わりをしたとき、『そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。』とあります。そして御霊によって、「大ききんが起こる」と預言したのです。預言どおりになりました。これは、実際的な挑戦だったのではないのでしょうか。即ち祝福されたアンテオケの兄弟姉妹は、結果として何をしたのでしょうか。エルサレムの教会は、ききんによってひどい目に遭いました。その前の章をちょっと見ましょう。

使徒の働き 11章29節

そこで、弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。

彼らは心を尽くして、「私たちは兄弟たちを助けなければならない」と決心しました。即ち彼らは、「私たちはエルサレムから遠く離れているし、アンテオケの集会は独立したものだから、エルサレムで悩んでいる人々は私たちの責任ではない」という態度はとらなかったのです。私たちに「本当の主の祝福」があったら、いつも全世界の兄弟姉妹に対する愛があります。ですから、この29節です。

使徒の働き 11章29節、30節

そこで、弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。彼らはそれを実行して、バルナバとサウロの手によって長老たちに送った。

とあります。

このように、バルナバとサウロは、起こった危機によってエルサレムに行ったわけです。もしアンテオケの祝福された人々が、「私たちはエルサレムから遠く離れている。別に何もしなくても良いではないか」と思ったなら、サウロとバルナバはもちろんエルサレムへ行かなかったでしょう。またエルサレムで行なわれる主のみわざを経験することもできなかったでしょう。アンテオケの兄弟は、必ず束縛されたに違いありません。また、サウロとバルナバは、もちろん宣教師として出かけたのではなかったでしょう。

「御霊に対する従順」は、本当に大切です。この出来事によって一つのことが明らかです。即ち私たちの個人個人の問題や困難は、主とのもっともっと大きな活動との関係を持っているということです。アンテオケの教会は主の豊かな祝福を経験し、主との親しい交わりを味わい、御霊の御声に従い、エルサレムに住んでいる兄弟姉妹に援助を送ることに決めました。その時、その頃、ヘロデ王は教会、即ちエルサレムにいる兄弟姉妹に対して圧迫の手を伸ばしたとあります。

ご存じのように、このヘロデ王の攻撃は、人間の攻撃というよりも、悪魔の攻撃でした。

もし、主が教会に新しい啓示、新しい祝福、新しい愛と勝利を与えられるなら、悪魔は必ず激怒して攻撃します。そして私たちは、しばしばそれに対してびっくりするのではないのでしょうか。もし何か起こると、私たちはすぐ、「失敗したか。悪かった」などと考えるのではないのでしょうか。

ヘロデ王は教会の長老であるヤコブ（イエス様の血縁の弟）を剣で切り殺してしまっただけではなく、ペテロも捕らえにかかって獄に投じたとあります。しかし、当時の兄弟姉妹は、「大変だ！」と思わなかったようです。別に驚きませんでした。私たちのせいではないか、などと自責の念に駆られたのでもなかったでしょう。彼らは、「これは単なる人間の問題ではなく、悪魔の攻撃である」とはっきり分かったのです。ヤコブは剣で殺されました。多くの兄弟姉妹たちにとって考えられないほどショックだったでしょう。主はどうしてそんなことを許されるのでしょうか。

次に、ペテロが捕らえられてしまったのです。獄に投じられました。ペテロの状態は、もちろん望みのない状態となりました。信者たちにはどうすることもできませんでした。4節を見ると分かります。

使徒の働き 12章4節

ヘロデはペテロを捕えて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであったからである。

では信者たちは何をしたかと言いますと、あまり相談もしなかったでしょう。そして、正しい結論を出しました。「祈りしかない」と。5節の後半です。

使徒の働き 12章5節後半

教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

祈っただけではありません。『祈り続けていた。』ヘロデや悪魔の攻撃に対する教会の答えは、「熱心な心からの祈り」でした。「第一、第二の衛所」、また「鉄の門」があったのです。しかし、教会では「熱心な祈りが主にささげられた」とあります。主の使いは、この鉄の門を開けませんでした。聖書には、10節を見ると、『門がひとりでに開いた。』と記されています。即ち、「熱心な祈りによって開かれた」のです。

この12章を読むと、三つのことが分かります。

第一番目、教会の祈りの大切さ。

第二番目、主ご自身にささげられた祈りの必要性。

第三番目、ペテロのための熱心な祈り。

* 第一番目。教会の祈りの大切さ。

聖書はペテロの祈りについて語っているのではなく、教会の、兄弟姉妹の祈りについて

語っています。ペテロは自分の危機についてよく知っていましたが、すべてのことをゆだねて、彼はぐっすり眠ってしまった、とあります。これは、主に対する本当の信頼でした。「もうお任せました。今度は主の番です。殺されることがみこころだったら、それで結構です。主は守ることがおできになります。」これこそがペテロの態度でした。私たちは明日の朝、切り殺されるということが分かったらどうでしょうか。おそらく眠れないのではないのでしょうか。ペテロはぐっすり眠ってしまいました。

ここで、『教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。』とあります。私たちはこの祈り会に出席している兄弟姉妹の名前を知りません。これは別に大切ではないからです。(おそらくアンテオケから来たサウロとバルナバも、出席していたでしょう。)しかしこのような長老たちが大切なのではなく、重要なことは、「教会全体の祈り」です。みな一つになって祈りました。一致がなければ、主は悲しまれます。なぜかと言いますと、あふれるばかりの祝福を与えることがおできになれないからです。

悪魔の攻撃に対する解決は、教会の一致した祈りです。悪魔はもちろん今でも変わりません。悪魔は、今日もヘロデたちによって私たちを攻撃します。主の道、主の方法に対する反対者が多くいます。しかし、私たちの愛する主は変わらないお方です。昨日も今日もいつまでも変わらないお方です。主こそ、ほむべきお方ではないのでしょうか。主は今日も祈りを聞き届けておられるお方です。

また、まことの教会も変わりません。生きている教会とは、霊的な一致をもっています。聖霊の力による生きている一致は、本当の教会です。このような教会は変わることがありません。私たち兄弟姉妹は、この教会に属する特権にあずかっているのでしょうか。

ここで、「教会では熱心な祈りが主にささげられた」とあります。まことの教会の仕事や教会への奉仕は、「熱心な祈り」です。当時の兄弟姉妹は、実際的に私たちはどうすることもできないという事実を認めました。彼らは、だからこそ主の助けに頼ったのです。もし、主ご自身が奇蹟を行なわれなければ見込みのない状態である、と彼らははっきり分かったのです。ですから、教会では熱心な祈りが主にささげられたのです。彼らは本当に心から熱心に祈ったのです。なぜかと言いますと、(ちょうどその時が毎週の祈り会だったからではありません。そして、もし誰も祈らないなら変ではないか、と考えたのでもありません。)「今から祈り続けなければ、悪魔の勝利になる」と分かったからです。

彼らは、どうしても主ご自身の助けが必要でした。「もし、主が力あるみわざを行なってくださらなければ、私たちはもうおしまいだ。見込みのない状態に陥ってしまう」と。

私たちの祈りは、何としばしば義務的な祈り、浅薄な祈りとなっていることでしょう。私たちは、悩んでいる兄弟姉妹、困っている兄弟姉妹とともに悩み、彼らのために熱心な祈りをささげているのでしょうか。短い箇所ですが、次のように書かれています。

ガラテヤ人への手紙 6章2節

互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。

別の箇所（黙示録3：18）で、『目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。』と主は言っておられます。自分のことだけを考えれば、主の望まれる祈りが湧き出てきません。希望を失った兄弟姉妹、絶望している兄弟姉妹の回復のために、どうしても教会全体の祈りが必要です。もし主が彼らの心の目を新しく開いてくださらなければ、彼らも、また私たちも見込みのない状態に陥ってしまいます。あの兄弟姉妹に対する責任は自分のものではない、と考えたら本当に災いです。私が主に祝福された者であるならこれで充分だ、と思う人が多いのではないのでしょうか。しかし、これもあってはならないことです。自分自身が不幸になる早道です。体の血がちょっとだけ止まると、体全部がそれをもちろんすぐ感じるでしょう。一人の信者の信仰生活が制限されたら、教会全部がそれを感じるでしょう。からだの肢体の一つだけでも病気があったら、からだ全部が病気なのです。二人の信者だけでも一致を持っていなかったら、教会全部が前進しません。教会全体の祈りは本当に大切です。

* 第二番目。主ご自身にささげられた祈りの大切さ。

使徒の働き 12章5節後半

教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

「主ご自身にささげられた祈り」も要求されています。この最後の二つのことば、即ち、「神に」というのは、そんなに大切ではないと考えている人もいるかもしれません。或いは、私たちは偶像礼拝者ではないから、神にささげられた祈りは当たり前ではないかと思う人もいるかもしれません。まことの祈りとは、「神にささげられた祈り」です。当時の信者の祈りは、主ご自身にささげられた祈り、また煩悶から出た叫びでした。偽善的な祈り、また習慣的な祈りは恐ろしいものです。傲慢はひどいものです。恐ろしいものですが、祈りの場合には、この傲慢は二倍の醜さを表わします。

私たちは、どのような態度で祈るのでしょうか。人に注目されるためでしょうか。自分自身を、また他の兄弟姉妹を意識しているのでしょうか。或いは、主ご自身にだけささげられているのでしょうか。私たちの内に熱い祈りがあるのでしょうか。もちろん、自分で祈る場合、一生懸命祈るでしょうけれど、他の兄弟姉妹が祈ったら、私たちは、他の兄弟姉妹と一緒に心を合わせて祈るのでしょうか。或いはこの兄弟に対して、あの姉妹に対して、批判的な態度をとるのでしょうか。兄弟姉妹に対する批判は、イエス様に対する批判です。恐ろしいことです。

エルサレムの兄弟姉妹は、本当に一つでした。バルナバやサウロがとても素晴らしい祈りのことばを使ったか、年寄りのおばあちゃんが非常に恥ずかしそうに祈ったか、教会が熱心に祈ったか、ある人が声を出さないで祈ったか、私たちは知りません。しかし言えることは、彼らは一つでした。ばらばらではなかったのです。

以前、非常に喜んで集会に来て賛美をし、主のために生きたいと思っていた兄弟姉妹が来なくなっていました。どうしてでしょうか。全く分からないのですが、彼らは喜びも平安も、今持っていないはずです。私たちはこのような兄弟姉妹に対して無関心ですませているのでしょうか。毎日、彼らのために熱心に祈っているのでしょうか。信じる者の無関心によって、悪魔は勝利を得ます。エルサレムにいる人々について書かれています。即ち、『教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。』とあります。私たちも一つになって、熱心に、悩んでいる、困っている兄弟姉妹のために祈ろうではありませんか。

エルサレムにいる兄弟姉妹は、一つになってともに祈りました。エルサレムにいる兄弟姉妹は「主ご自身に祈った」のです。他の人を自覚しないで、主だけを仰ぎ見たのです。

* 第三番目、ペテロのための熱心な祈り。

ご存じのように、大ききんの後で大迫害が続いて来ました。ヤコブは剣で切り殺されました。ペテロは獄に入れられたのです。次の朝ペテロも同じく殺されるはずでした。これは教会全体のために何と厳しい信仰の試練、何という恐ろしい試みだったでしょう。悪魔は、信じる者たちを不安や絶望に陥れようと努力したでしょう。確かにペテロだけが獄に入れられていましたが、これは、教会全体のために恐ろしい試練でした。しかし兄弟姉妹は、「ペテロは明日殺されるだろう。もう駄目だ。あきらめたほうが良いのではないか」と考えなかったのです。『神に熱心に祈り続けていた。』とあります。エルサレムにいる兄弟姉妹は、ペテロのために熱心に祈りました。ペテロは、決して「完全」な人間ではなく、彼も失敗し、過ちを犯したに違いありません。しかし、兄弟姉妹たちは、「ペテロはもう少し注意したなら…。それは自分のせいだ」などとは、決して考えなかったのです。あらゆる議論、あらゆる疑いは、悪魔の働きの結果です。信じる者の一致を壊そうとすることが悪魔の目的です。しかし、エルサレムの兄弟姉妹が信仰によって、一つになってペテロのために熱心に祈りました。彼らはペテロとともに悩んだのです。

私たちは今、当時の信じる者たちの迫害を経験してはいないでしょう。けれど毎日悪魔の憎しみを感じます。信じる者の霊的な交わりを駄目にするために、悪魔はあらゆる手段を用いて攻撃しています。批判、また疑いによって、本当の交わりは不可能になります。悪魔の目的とは、私たちが信仰や希望を失うこと、お互いの愛を弱くすることなのです。エルサレムにいる兄弟姉妹はこの危険をすぐ感じました。ですから、彼らは一つになって、ペテロのために熱心に祈ったのです。もちろんペテロのためだけではなく、主のご栄光が現われるために祈ったのです。

私たちは一緒に祈るとき、はっきりとした目的を持つべきです。はっきりとした目的をつかむこと、また、一致することは欠くべからざることです。

教会全体の祈りとは、いったいどのようなものなのでしょうか。幾人が集まって、一人一人が自分の願いを祈ったり、感謝したりするのでしょうか。決してそうではありません。集

まっている兄弟姉妹が個人個人のものではなく、主イエス様のからだ、イエス様の代表であるべきです。即ち、教会全体の祈りによって霊的な力が現われ、主イエス様のご支配が明らかになるべきです。

エルサレムの教会は、ペテロのために熱心な祈りを主にささげました。そこに、イエス様のご支配が明らかになりました。私たちの祈りによって、姿を消した兄弟姉妹の生活の中心に、イエス様のご支配が明らかになりますように。

いったいなぜ、エルサレムにある教会はペテロのために祈ったのでしょうか。彼を愛したからでしょうか。それは当たり前のことかもしれません。しかし、そのおもな理由は、「主のみこころ」だったからです。ペテロが獄に入れられていた時、教会の喜びや、教会の証しの奉仕は必ず制限されていたに違いありません。また主が栄光をお受けになれませんでした。ですから、教会ではペテロのために「熱心な祈りが主にささげられた」のです。

私たちはいったいなぜ、離れた兄弟姉妹のために祈らなければならないのでしょうか。もちろんどのようなことがあっても、私たちは一人一人を愛さなければいけません。そうしなければ悪魔は勝利を得ます。しかし、「主のみこころ」が問題です。兄弟姉妹が悪魔の獄に入れられていると、私たちの喜びや証しや奉仕は制限され、束縛されています。また、主は栄光をお受けになれません。ですから、私たちはどんなことがあっても、離れている兄弟姉妹のために熱心に祈らなければならないのです。

エルサレムの教会は、自分のために祈りませんでした。いつも自分、自分、自分のために祈っている信者は、決して前進しません。エルサレムの兄弟姉妹が自分のために祈った場合を、想像してください。ペテロはそのまま獄に入れられていて、次の朝、殺されたでしょう。しかし、兄弟姉妹は悪魔の攻撃に負けませんでした。自分のために祈ろうとしなかったのです。御霊に従い、ペテロのために熱心な祈りが主にささげられたのです。はっきりとした目的を持って祈りましょう。離れた兄弟姉妹のために祈りましょう。これは、主のみこころです。

イエス様は、「わたしが来たのは、彼らにいのちを得させ、豊かに得させるためである」と言われたのです。しかし、悪魔の獄に入れられている兄弟姉妹は、この豊かないのち、また主の喜びを持っていません。エルサレムにいる兄弟姉妹はみな、ペテロのために熱心な祈りをささげました。すべての信者は、ただ一つの目的を持っていました。彼らは霊的な一致を持っていました。

しばしばこのようなことがあるのです。一人の姉妹は自分のために祈り、他の兄弟は友だちのために祈り、また別の姉妹は日曜学校のために祈ります。もちろんこれは決して決して悪くありません。しかし、もし聖霊が教会を支配なさることができるなら、私たちは、はっきりとした目的、即ち「御霊ご自身の目的」を持たなければなりません。信じる者が

ともにするとりなしの祈りは考えられないほど大切です。

祈りをしているエルサレムの教会では、ペテロのために熱心な祈りが主にささげられました。この祈りは確かに恐ろしい戦いでした。『私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天にいるもろもろの悪霊に対するものです。』と、エペソ書6章に書かれています。エルサレムの兄弟姉妹は、血肉に対して、即ちヘロデ王に対して戦おうとしなかったのです。彼らは、天上にいる悪の霊に対して戦いました。そのためにどうしても霊的な一致が必要でした。

パウロは、「私たちの目的がはっきりしないような走り方をせず、空を撃つような拳闘はしない」と証したのです。私たちの敵は悪魔です。ヘロデ王たちの後ろに悪魔が働いているのです。兄弟姉妹の疑いの後ろに、また、毎日の生活のいわゆる小さな出来事の背後に、悪の霊があります。

最後に、少しだけこの祈り会の結果について考えてみましょう。

一言で言えば、この祈り会の大切な結果は、霊的な勝利でした。悪魔は、如何にしてこの信者たちを散らそうか、と努めたのです。彼らが不安や絶望に陥ってしまい、妥協し、止めさせるようにすること、これが悪魔の目的でした。けれど、「教会では彼のために熱心な祈りが主にささげられた」とあります。もし悪魔の攻撃によって信者たちみな散らされて、不安や絶望に陥ってしまったなら、ということ想像してみてください。これは主のみことばに対して何を意味しているのでしょうか。エルサレムの教会の霊的な力やペテロの将来は、そんなに問題ではなかったのです。「主のみことば」は、重要でした。そして、この霊的な戦いの後に、前に言いましたように12章24節に、
使徒の働き 12章24節

主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った。

とあります。

これは、この祈り会の大切な結果の一つでした。またヘロデ王も滅んでしまったのです。信者たちは、そのために別に祈らなかったと思います。ヘロデ王は、神にご栄光を帰することをしなかったので駄目になりました。教会全体の祈りによって、霊的な力が現われ、主イエス様のご支配が明らかにならなければならなかったのです。エルサレムの教会がそうでした。「教会の祈り」によって、主のご支配が明らかになりました。悪魔の道具であるヘロデ王は、聖書によると、「虫にかまれて、息が絶えてしまった」とあります。このように、主が栄光をお受けになりました。教会の祈りは何という奇蹟を行なう力なのでしょう。

12章の初めに、『ペテロは牢に閉じ込められていた。』とあります。もちろんペテロが獄に入れられていた時、教会の喜びも、教会の証しも、教会の奉仕も制限されていました。しかし、ヘロデや悪魔の攻撃に対する教会の答えは、「熱心な祈り」でした。

この祈りの大切な結果について、12章の終わりに語っています。即ち、『主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った。』と。全世界に福音が広められた、ということです。13章を見ると分かります。パウロとバルナバは、エルサレムからアンテオケへ帰ってすぐに、宣教師として出かけたのです。エルサレムの教会は一般の家庭で集まって、熱心な祈りが主にささげられました。そして、『主のみことばはますます盛んになり、広まって行った。』と。

さてもう一つの結果は、「まことの礼拝」だったでしょう。

ペテロには御使いの導きが現実のこととは考えられず、幻を見ているように思われました。しかしこれは幻ではなかったのです。現実でした。ペテロはそのことをすぐ信じなかったようです。また、祈っているエルサレムの教会も同じく、ペテロが解放されたことを初めは信じられなかったのです。彼らは女中ロダに何と言ったかと言いますと、「あなたは気が狂っている」。けれど後に、彼らはペテロと一緒に必ず主を崇めたに違いありません。

エペソ書3章20節と21節、よく知られているみことばですが、もう一度読みます。
エペソ人への手紙 3章20節、21節

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

イエス様はいつも、私たちが求め、また思うところのいっさいをはるかに超えてかなえてくださいます。ですから、賛美と誉れと栄光がおのずと出てきます。自発的に喜んでささげるようになります。

エルサレムに集まった兄弟姉妹は、この祈り会の大切さをあまりよく理解していなかったかもしれません。しかし彼らはただ、これだけは知っていました。「今、祈らなければならない。祈らなければ喜びがなく、福音は広まらない」。このことを彼らは知っていました。ペテロの解放にこれらの事からは深い関係があったのです。ですから、彼らはペテロのために熱心な祈りを主にささげました。しかし、彼らはこの祈り会の結果、ヘロデ王が虫にかまれて殺され、主のみことばが全世界に広まるということは考えもしなかったでしょう。

私たちが祈らなければ、「イエス様は主である」という証しが、私たちを通して立たず、また、私たちも信者として進歩がなく、そればかりでなく、離れた兄弟姉妹も元へ戻りません。ですから祈りましょう。そうするなら、私たちは祝福され、その証しは多くの人々に広められ、多くの人が、「イエス様は主である」と告白し、離れた兄弟姉妹も元へ戻るのです。

もし、私たちがこのように祈るなら、この祈りは日本だけではなく、全世界に大きな影響を及ぼすのです。私たちのきわだった特徴が「祈り」でありたいものです。そのために熱心な祈りを主にささげましょう。

最後に、ある兄弟姉妹の書いた文章を紹介します。皆さんご存じですが、ドバイにいるS兄弟とA姉妹です。

「イエスのご再臨がもうすぐだと思うと、とてもうれしいです。私たちの家族に次々と起こる問題も、背後にイエス様のご計画があると知り、悲しみながら喜んでいます。愛する集会の兄弟姉妹とともに祈り、イエス様だけを見上げて将来も戦いたいです。」

この態度をとるなら、主は必ず大いに祝福してくださるに違いありません。

了